

1

No.19 (通号)

國學院大學研究開発推進機構ニュース

平成28年 (2016) 6月25日

國學院大學 研究開発推進機構 機構ニュース

Vol.10 No.1

発行人 井上 順孝
編集人 平藤喜久子
〒150-8440 東京都渋谷区東
4丁目10番28号
電話 (03) 5466-0104
FAX (03) 5466-9237

日本文化研究所 平成二十八年度事業計画① デジタル・ミュージアムの運営 および日本の宗教文化の国際的研究と発信

本プロジェクトは、平成二十五年
度から二十七年まで実施された
「デジタル・ミュージアムの運営お
よび教育への展開」の後継的な位置
づけのプロジェクトとして本年度ス
タートした。

これまでのプロジェクトでは、研究開
発推進機構全体で構築してきた「國學
院大學デジタル・ミュージアム(Dttd
://k-anc.kokugakuin.ac.jp/DM/)
の運営、またデジタル・ミュージアムを
通して発信するプロジェクト独自のコン
テンツの拡充を手がけてきた。本プロ
ジェクトでは、これらに宗教文化教育
の教材研究についての国際的な展開を
加え、事業を遂行していくこととした。

なお、平成二十八年度には、文化
庁「地域の核となる美術館・歴史博
物館支援事業」に國學院大學博物館
の「東京・渋谷から日本の文化・こ
ころを国際発信するミュージアム連
携事業」が採択された。この事業に
は本プロジェクトの事業内容と目的
が重なり合う部分もあり、プロジェ
クトの構成員が中心的な役割を果た

すことが期待される活動も含まれ
る。本年度の活動を行うにあたつ
て、この事業との連携も取っていく
ことにしたい。

一、デジタル・ミュージアムの運営
デジタル・ミュージアムは、平成
二十一年度より本格的に運用を開始し
たもので、研究開発推進機構全体の
情報発信の有機的連関を図り、日本
文化研究所が蓄積してきた研究成果
や学術資産、研究開発推進機構に
よって実施されている研究成果や各
種のデータベース等をデジタル化
し、主としてインターネットを通し
て国際的に発信していくものとして
運営されてきた。平成二十八年度五
月末現在で二十六のデータベースが
公開されている。

運営に当たっては、本事業の担当
者、研究開発推進機構の各機関の
データベース担当者および研究開発
推進機構事務局、図書館、広報課、ソ
フトウェア提供会社の担当者からなる「デジ
タル・ミュージアム・ワーキンググルー
プ」を組織し、定期的に会合を重ね、

目次

◆日本文化研究所 平成二十八年度事業計画① デジタル・ミュージアムの運営 および日本の宗教文化の国際的研究と発信 (平藤喜久子)	1
◆日本文化研究所 平成二十八年度事業計画② 「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開 —明治期の国学・神道関係人物を中心に— (遠藤潤) 大学ミュージアムにおける「学芸研究」 「学芸情報」・「文化財研究」基盤の整備 (内川隆志・深澤太郎)	3
◆学術資料センター 平成二十八年度事業計画④ 祭祀・祭礼の変遷に関する研究と関連資料の整理分析 (大東敬明)	6
◆校史・学術資産研究センター 平成二十八年度事業計画① 國學院大學における古典学の展開に関する研究と公開 (渡邊卓)	7
◆校史・学術資産研究センター 平成二十八年度事業計画② 國學院大學の学術資産の研究と展示公開 (渡邊卓)	8
◆研究開発推進センター 平成二十八年度事業計画① 研究開発推進センター研究事業 (宮本蒼士)	9
◆研究開発推進センター 平成二十八年度事業計画② 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」 (宮本蒼士)	10
◆研究開発推進センター 平成二十八年度事業計画③ 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 「古事記学」の構築 (渡邊卓)	11
◆國學院大學博物館 平成二十八年度事業計画 平成二十八年度 文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」 東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業	12
◆事業計画・人事一覧	14
◆彙報	16
◆資料紹介 「佐佐賀県脊振山出土 銅製経筒」	20

問題点を共有しながら、利用者およ
びデータベース構築者の利便性を高
めるための工夫を議論している。

本年度については、第三者による
デジタル・ミュージアム上の画像利
用についてのルール作りやスマート
フォン対応、動画、音声使用の利便
性の向上などについて課題として取
り組んでいる。また、地図アプリ「ロ
ケスマ」(株式会社デジタルアドバ
ンテージ)を活用したデータベース

公開を行っているが、このコンテン
ツの充実も図っていききたい。

二、デジタル・ミュージアムの展開の
ための独自のコンテンツの構築
①神道に関する日本語・英語のポー
タルサイトの構築
現在デジタル・ミュージアムでは、
日本文化研究所の独自のコンテン
ツとして、いくつかの英語のデータベ
ースを構築し、公開している。主要な
ものとしては、神道事典の英語版である



Encyclopedia of Shinto や神道・日本宗教に関する研究論文を、外国語から日本語に、また日本語から外国語に翻訳して公開するデータベース Articles in Translation (双方方向論文翻訳) 一九五八年に日本で国際比較宗教学宗教史世界会議 (IAHR) が開催されるにあたって作成した Basic Terms of Shinto 神道基本用語集がある。その Encyclopedia of Shinto のなかに初心者向けのコンテンツ Images of Shinto: A Beginner's Pictorial Guide 図説による神道入門も公開している。

これらのコンテンツは、現在のデジタル・ミュージアム上では、日本語に習熟していない外国人にとっては、見つけづらく、使いづらい状況におかれている。そこで神道に関する情報へのまきに入り口となるべきサイトを作成したいと考えた。これは英語だけではなく日本語版も視野に入れ、国内外の学生が神道を学ぶときに活用できるポータルサイトを旨とする。

今年度はレイアウトの検討を行いつつ、各データベースの内容を充実させることに注力し、本格的には来年度の運用開始を目指したい。

② 神道古典の英語訳

本事業であらたに取り組み独自コンテンツとして、神道古典の英語訳がある。海外の日本研究を志す人々に、広く資する翻訳の提供ということで、まず古事記の英語訳に取り組みむこととした。古事記については、すでに B・H・チェンバレンが一八八二年に訳し、また Donald・F・ライッパイも一九六八年に翻訳をして

いる。そして二〇一四年にはヘルトによる新たな英訳も刊行された。しかし、チェンバレンの古事記は一部がラテン語になっており、またライッパイの翻訳は、神名等の表記が古代日本語の音韻にこだわったものとなっている。ヘルトの場合は、神はほとんどすべて spirit と訳される。いずれも一長一短がある。さらに日本における研究状況を反映した注釈などはない。そこで、研究開発推進センターの「古事記学」の構築に研究事業と連携し、訳文や訳語を決定し、注釈も含めた翻訳を作成していくこととした。公開に当たっては専門家による精査をしていただき、国際的に信頼され、長く使用される翻訳を提供していきたい。

③ 収集している教派神道・神道系新宗教の資料の整理とデジタル化

現在は、福岡県北九州市小倉南区に本部を置く神理教の教祖・佐野経彦関連の資料として『本教神理図』を公開している。本年度は加えてこれまで収集してきた神理教や神道修成派を中心とする教派神道、神道系新宗教に関する文書資料について、公開を進めていく。これにより教派神道、神道系新宗教の研究の進展に資することができると考えている。

④ 現代宗教に関する資料・データの収集とそのデジタル化

日本文化研究所では、一九九五年より「宗教と社会」学会のプロジェクトと連携し、学生宗教意識調査を実施してきた。平成二十七年度には

第十二回学生宗教意識調査を実施し、約二〇年にわたる調査に一つの区切りを付けた。本年度は、これまで実施してきた調査の結果をまとめ、公開していく。

② 日本文化、宗教に関する教材の作成、オンライン公開

学術メディアセンターに設置されている「宗教文化教育推進センター」と協力し、日本文化、宗教文化教育のための教材作成を進めていく。現在は「世界遺産と宗教文化」、「映画と宗教文化」、「博物館と宗教文化」といったデータベースを公開しており、その拡充とあらたなデータベースの研究を進めていく。なお、これらはスマートフォンアプリ「ロケスマ」でも公開している。

③ 教材動画配信のためのシステム構築

Encyclopedia of Shinto では、これまで多数の動画を作成し、公開してきた。ほかにもこれまでの研究所のプロジェクトを通し、貴重な宗教文化に関する動画が撮影され、デジタル化が進められてきている。これらの動画資産を日本文化、宗教文化を学ぶための教材として国内外で広く使えるようにするため、本年度から公開の仕組みについて検討を始めることとした。今年度は、動画の整理、データベース化を進めるとともに、どういった形式で公開するかなどについて検討を行う予定である。

④ 国際的な教材研究の展開

上記の①③で得られた研究成果を国際的に発信していく。具体的には次に述べる国際研究フォーラム、ワー

クショップをその公開の場とする。四、日本文化研究所国際研究フォーラムについて

毎年日本文化研究所の行事として行っている国際研究フォーラムだが、今年度は SISR 東アジア国際ワークショップと連携して実施することとした。本ワークショップは、SISR (国際宗教社会学会 International Society for the Sociology of Religion: ISSR) が二〇一七年にメルボルンで学術大会を行うことを受け、その事前ワークショップということで開催されることになったものである。「東アジアのグローバル化と宗教文化」を共通テーマとし、二〇一六年一月一日(土)に SISR 東アジア国際ワークショップ(國學院大學学術メディアセンター会議室〇六)を、一月一日(日)に日本文化研究所国際研究フォーラム(國學院大學学術メディアセンター常磐松ホール)を開催する運びとなった。とくに国際研究フォーラムでは、日本文化研究所がこれまで二〇年余りにわたって積み重ねてきた学生宗教意識調査を踏まえた議論を行う。この二〇年を特徴づける一つのキーワードが「グローバル化」であり、それは宗教、および宗教への人々の意識に大きな変化をもたらしたと考えられる。この点について東アジアを軸として国内外の研究者と議論をする予定としている。本年度は、あらたにはじまる取り組みもあるが、これまでの研究、データの蓄積の国内外への発信をよりいっそう重視して行っていきたいと考えている。(文責・平藤喜久子)

日本文化研究所 平成二十八年度事業計画② 「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開 ―明治期の国学・神道関係人物を中心に―

この研究事業は、日本文化研究所の神道・国学研究部門における三年の研究事業として、平成二十七年に開始された。神道・国学研究部門では、平成二十三年度に、神道・国学の研究を遂行する拠点としての「國學院大學 国学研究プラットフォーム」(以下「国学研究プラットフォーム」と略する)を設定した。

これは恒常的な組織を意味するものではなく、国学に関わる学内外のさまざまな研究活動の連絡ハブとなるとともに、研究の基礎的情報を蓄積していく拠点を指向している。具体的には、「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築(平成二十三年～二十五年)と「國學院大學 国学研究プラットフォーム」を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究(平成二十六年)という、二期四年間にわたる研究事業および今回の研究事業の一年目において、「国学研究プラットフォーム」の運営が行われてきた。

この研究事業の目標は「国学研究プラットフォーム」を拠点として、「国学研究の基礎的データ構築」および「国学に関する研究連携のための組織づくり」を継続・発展させることにある。今回の研究事業での具体的なデータ構築としては、明治期の神道・国学・宗教関係人物の基礎

的情報の収集・整理を実施し、また組織づくりについては、これまで定期的に開催している国学研究会を運営するとともに、人物関係の収集情報や研究会などで得られた研究情報の公開を行う。

このような研究事業は、これまで國學院大學、なかでも日本文化研究所、研究開発推進センター、研究開発推進機構などが蓄積してきた研究成果を、人物をインデックスとして再整理し、基礎的な情報を、特定の視点から集約・再検討するとともに、現在までの研究成果をあらためて取り込む形で人物情報の収集を行うことを企図して実施するものである。

平成二十八年度の実施計画

I 近代の神道・国学関係資料の調査ならびに重要な人物を焦点とした先行研究の調査・検討

(一) 研究事業二年目として、先行の目録類などでの明治期に活動の見られる人物の確認を前提として、当該期の国学者、神道関係人物、教派神道関係人物などに関する著書・論文についての網羅的なリストの作成などを継続する。

さらに平成二十八年度は、これまでリストにあがった人物のうち

重要な人物を選定し、より重点的な調査・研究を行う。具体的には、平成二十七年の研究事業遂行によって、幕末から維新期にかけての国家的教化活動、神社行政分野で活動し、今日に資料を残した人物西川吉輔は、仏教など諸宗教との関係においても興味深い活動を行った。平成二十八年度は、滋賀大学経済学部附属史料館所蔵の西川吉輔文書など、西川の関連の史料をわれわれの視点で見直すことで当該時期の神道、国学、宗教に関する研究を深めるため、出張調査を行う。

(二) 上記(一)とあわせて、近代における国学関連領域(信仰、学問、そのほか)に関する調査・研究を実施する。すなわち人物研究を切り口として、江戸後期から明治期にかけて国学を学んだとされる人々が、近代に入ってから教派神道や仏教その他の信仰へと活動を広げた様子、あるいは、明治期に新たな国学研究(明治国学、近代国学)をはじめ文献学や近代の人文諸学などに学問を展開させた様子などを、一次文献や先行研究の調査を踏まえて研究し、重要な史料について必要に応じてマイクロフィルムからの複写も行う。

II 明治期神道・国学関係人物の基礎的データをもとにした項目執筆と定期的な検討

(一) 明治期の国学者および神社・教

派神道関係人物に関する先行の目録、「国学関連人物データベース」の記載事項の確認ならびに関係分野の先行研究の確認と内容の検討、ならびに調査項目やデータ設計などの具体的検討とともに基礎的データにもとづく項目執筆を開始する。

(二) 明治期の国学者および神社・教派神道関係人物に関する基礎的データの収集・整理を行う。

(三) 「国学研究プラットフォーム」によるこれまでの研究成果の整理と発信、旧日本文化研究所収集資料の現存状況の確認も継続して行う。

III 国学に関する研究連携のための組織づくり

江戸時代後期から明治期までを主たる範囲とする報告を順次行う国学研究会を月一～二回程度開催する。また、主として神道・国学関係一次文献の読解・学習や史料に関する研究情報の交換などを目的とした、社家文書研究会を運営する。

(文責・遠藤潤)

學術資料センター 平成二十八年度事業計画①～③ 大学ミュージアムにおける「学芸研究」・ 「学芸情報」・「文化財研究」 基盤の整備

大学ミュージアムの主要な使命は、学生に対する「教育参考」活動、研究者に対する「研究発信」活動、及び一般に対する「大学開放」活動に集約される。これらの根幹は、大学ミュージアムが所管する活用可能な資料に資料化された學術資料群にほかならない。

昨年度より、本学におけるミュージアム活動の中枢を担う國學院大學博物館が研究開発推進機構内の機関と明確に位置付けられ、「教育参考」・「研究発信」・「大学開放」といった諸機能も、一層の充実が図られた。その中で、學術資料センターは、博物館の所蔵する學術資料・學術資産の整理保管と調査研究を進めてきた。とりわけ考古学部門においては、次の①～③に掲げた事業を集中的に実施している。

①大学ミュージアムにおける「学芸研究」 基盤の整備

本事業は、旧考古学資料館の前身である考古学陳列室が開設された昭和三(一九二八)年以来、長きに亘って収集してきた考古・民俗資料等の再整理を進めている基盤プロジェクトである。

現在、考古学部門が所管する學術資料は、総数十万点以上に及び、台帳登録件数も六〇〇〇件を超えた。

しかしながら、開館以来九十年近い年月が経過する中で、遺憾ながら台帳と所管資料の対応関係が不明確な点も散見される。そこで、台帳をデジタル化した上で、資料の出土地を現在の地名に変換し、「国・地域」都道府県「市町村」遺跡」の順に目録を作成した。目下は、この目録に従って、台帳番号と実物資料の対応関係を検証しているところである。

既に、ここ数年の事業展開によって、長らく忘れられていた貴重な資料の掘り起こしも実現しており、これまで報告されていなかった資料やコレクションの存在も明らかになってきた。考古学的な研究の経過はもとより、近代における學術資料収集の背景についても新たな興味深い知見が得られている。昨年度の具体的な取り組みとしては、①台帳番号が記載されている資料(展示資料を含む)の存否確認と収納、②台帳番号が記載されていない資料群の把握と一括番号付与、③特定學術資料の調査・研究、④データベースの構築などを推進すると共に、『國學院大學博物館研究報告』等において幾つかの研究成果を発表している。

今年度も、①収蔵庫・展示室における現行「台帳」に基づく列品確認(※列品確認は「台帳」・「コレクション」台帳」毎に実施する)。

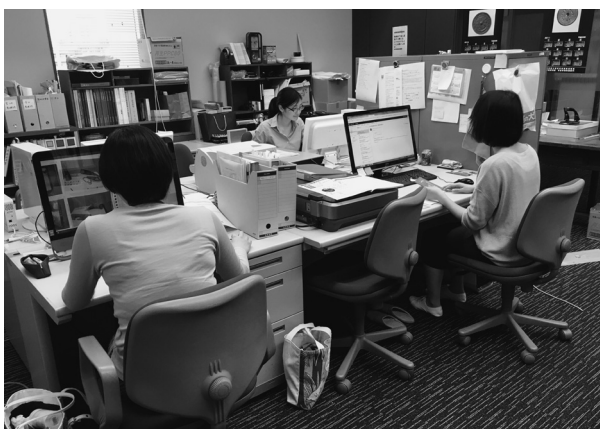


「未登録資料の全体像把握(※既報資料から重点的に再確認していく)」。③考古収蔵庫内保管資料の地域・遺跡毎収納。収納システムの構築(※金属器・木製品・動植物遺体などの取り扱いについては要検討)。整理されたデータは最終的には、「台帳」・「目録」として順次増補公開していく予定である。

特定學術資料の調査・研究については、先史では「長野県須坂市石小屋窟遺跡出土資料の再整理」事業、原史では「祭祀遺跡関連資料の調査研究」事業。有史では「和鏡の調査研究」事業。外国では「鞍山中学旧蔵梅本俊二資料の調査研究」を予定している。

②大学ミュージアムにおける「学芸情報」 基盤の整備

本事業は、平成十一(一九九九)年に開始された旧日本文化研究所の



學術フロンティア事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」や、オープンリサーチセンター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」における大場磐雄資料・宮地直一資料の再整理などを継承するものであり、博物館の館蔵學術資産をアーカイブ化し、公開していくプロジェクトである。

当事業が所管する考古学・民俗学研究の副産物である學術資産は、その多くが画像や図面・書類である。そこで昨年度は、これまでの先行事業で整理を進めてきた資料を含めた學術資産と、それらの管理状況に関する全体像の把握を最大の課題とした。その結果、學術的活用と、文化財保護の両側面から、優先的に目録化・デジタル化を進めるべき資料の選定が容易になった点は、大きな成

果と言えよう。但し、資料の現状に對して、その保管環境は必ずしも良好とは言えない現実も明らかになり、対応が急がれるところである。

今年度の事業としては、既に整理の進捗が著しい柴田常恵資料の公開や、民俗学関係の画像整理を進め、併せて館蔵学術資料のデジタル情報化も推進していく。

特に柴田常恵資料に関しては、平成二十七(二〇一五)年度は柴田の野帳の公開を行ったが、今年度は柴田自身による清書されたノート類の翻刻が進められている。この中には柴田が亡くなった友人に関して記録した「亡友追慕録」、柴田の読書記録である「讀書餘録」等があり、これらは文化財調査官として活躍した柴田の軌跡を伝えるとともに、文化財保護史の貴重な資料といえよう。平成二十五年度からの継続事業として、神社絵葉書データベースの作成があり、平成二十五年度の公開時点では、青森・岩手・宮城・福島の四県を扱ったものであったが、平成二十六年には秋田・山形の二県、平成二十七年には北海道・茨城・栃木・群馬・埼玉の一道四県が追加され、今年度は千葉・東京・神奈川の一都二県を追加して、神社の他に仏閣・名勝の絵葉書を多数収録していることから、「社寺等絵葉書データベース」として公開することを予定している。

③大学ミュージアムにおける

「文化財研究基盤」の整備
大学ミュージアムには、その中核

的な「学芸研究」機能や、学術標準群等に関する各種情報・DBを管理し、学内のMLA連携を進めていく「資料研究」機能の他、内外の研究機関等と連携して具体的な研究活動を広く推進していく「文化財研究」機能も欠くことができない。そこで、当センターでは、伝統文化リサーチセンターから引き継いだ祭祀遺跡DB作成事業を基盤に、本学ならではの「祭祀考古学研究」拠点構築を目指していく。また、同じく伝統文化リサーチセンターで実施してきた領域横断的な地域文化研究(有形・無形文化財研究)を推進し、昨今の地震被災地を含む地域資産の保護・研究を進めていく「地域文化財研究」拠点を構想する。さらに、埋蔵文化財調査の即応体制を整備すると共に、本学が学史的に関与してきた埋蔵文化財等について、外部資金を受けて調査・研究を進める受け皿として「埋蔵文化財研究」拠点を形成する。

(i)「祭祀考古学研究」

拠点構築サブプロジェクト

旧伝統文化リサーチセンター考古学グループが構築に取り組んできた祭祀遺跡データベースの継続整備を中核として、「祭祀考古学研究」拠点の構築を目指していくものである。また、相山林継名誉教授(元日本文化研究所長・元伝統文化リサーチセンター長)を会長とする祭祀考古学等と連携しながら全国的な祭祀考古学研究ネットワークを構築し、網羅的かつ最新の学術情報にアクセスできる研究・教育拠点を作り上げて

いく。今年度からの具体的な計画としては、出土和鏡・紀年銘鏡集成DB等の再構築を重点事業として推進する。

(ii)「地域文化財研究」

拠点構築サブプロジェクト

旧伝統文化リサーチセンターが取り組んできた領域横断的な地域文化研究(有形・無形文化財研究)を推進し、特定地域の総合調査と研究・教育を可能とする研究基盤を整備していく。テーマの必要性に応じた多様な研究ユニット、即ち学内・学外研究者(考古学・歴史学・民俗学・地理学・宗教学・環境学など)のハブとしての機能を構想する。具体的には、当センターが継続的に研究対象としてきた伊豆地域に加え、被災地を含む東北地方における資料収集・調査研究を実施する。今年度も



何らかのあたりで被災地に貢献できる事業を展開したい。

(iii)「埋蔵文化財研究」

拠点構築サブプロジェクト

文学部・文学研究科の考古学研究室と共同で、文化財調査・整理・研究基盤を構築する事業である。また、外部からの研究事業受託の受け皿を整備するものであり、若手研究者・学部学生、大学院生等による、実践的な文化財研究実習の効果も期待される。一昨年は、長野県須坂市からの受託事業である八丁鎧塚古墳出土遺物の再整理事業。昨年度は、東京都調布市からの受託事業である国指定史跡下布田遺跡出土遺物の再整理を実施した。

(iv)学芸員実践教育の場としての大学ミュージアム活動

三つの基盤整備プロジェクトにおいては、これらの事業に参画する学部学生、大学院生の実践教育の場としての位置付けにも重点をおいている。すなわち、これらの事業では、学芸業務を担う臨時雇員として学生・院生を任用し、ミュージアム活動の実務を推進する。この取り組みは博物館・学術資料センターの研究・公開事業と、学部・大学院教育の連携であり、専攻学生の育成や、キャリアデザインに資するものとなる。研究事業の推進と同時に、即戦力としての学芸教育成果が得られるものと考えている。特に博物館業務との関わりは人文系博物館学芸員としてのスキルアップに大いに繋がることが期待できる。

(文責・内川隆志 深澤太郎)

学術資料センター 平成二十八年度事業計画④ 祭祀・祭礼の変遷に関する研究と 関連資料の整理分析

はじめに

研究事業「祭祀・祭礼の変遷に関する研究と関連資料の整理分析」(以下、「本事業」)は、学術資料センター(神道資料館部門)(以下、「本部門」)がこれまで進めてきた神道資料の収集・整理作業を継承しつつ、祭祀・祭礼に焦点を絞り研究し、それを教育や新たな資料収集に反映させるためのものである。

事業の目的

本事業では、まず、祭祀・祭礼に関する資料を整理・分析する。その上で、現行の祭祀・祭礼や芸能などと比較し、その変遷や全国各地への伝播の過程を明らかにする。これを第一の目標に据える。

また、祭祀・祭礼に関連する歴史資料と伝承資料の双方に注目することとで、古代から現代までを見据えた祭祀・祭礼の変遷について研究する。さらに、それに関する資料の収集・整理をあわせて行う。

この研究を、学内所蔵資料の公開を見据え展開する。これにより、具体的な資料を通して、神道に関する情報を提供することができる。よって、本事業は、研究成果や、研究に用いた資料の積極的な公開を第二の目標に据える。この公開は、学生・一般を主たる対象とする。

平成二十七年度の成果

平成二十七年度は、これまで本部門が進めてきた研究を土台として『香取神宮神幸祭絵巻』の研究、『東都歳事記』を用いた江戸の祭礼の研究をすすめた。

『香取神宮神幸祭絵巻』の研究については、平成二十七年十一月より本年一月まで千葉県立美術館で行われた特別展「香取神宮 神に奉げた美」に本部門の研究成果を提供したことが中心となる。また、この研究成果は、同特別展の展示図録にも掲載した。

江戸の祭礼の研究では、國學院大學博物館において特集展示「番附にみる天下祭」(平成二十七年五月二日～二十四日)、「夏の祭―祇園祭と天王祭―」(同七月十一日～八月三十日)を開催し、その研究成果の一部を公開した。

これらの成果は、本部門が刊行する『館報』一五号に「香取神宮神幸祭絵巻」と祭礼文化」と題する特集を組んで広く一般にも示した。

このほか、これまで調査・整理を進めてきた宮地直一旧蔵の天神人形の一部を本学博物館で行った特集展示「天神さま」(平成二十八年一月三十日～三月十三日)の中で公開した。また、この天神人形は、西南学院大

学博物館においても「天神人形―各地の天神さま―」(同二月十五日～五月二十五日)として展示した。これは本学博物館が進めている同館との相互貸借特集展示の一環である。なお、平成二十八年五月二十五日には大東が同館で、本部門の研究成果を踏まえたミュージアムトークを行った。

平成二十八年度の計画

本年度は、本事業の最終年度にあたる。このため、これまでの研究成果を再検討しつつ、畿内における祭礼の発生と、地方への伝播、その展開に注目しつつ研究をすすめる。その際、祭礼行列の花とも言える山・鉾・屋台や芸能、行列の中心となる「神輿」などの行列の構成要素に注目する。

・國學院大學博物館における展示

本部門は、國學院大學博物館の神道展示室及び企画展示室における展示の企画立案、実施を博物館と協働してすすめている。企画立案に際しては、本部門の研究成果を反映させてきた。

本年度は、企画展「祭礼行列―渡る神と人―」(十月十五日～十二月五日)を博物館企画展示室において行う。これは、先述した本年度の祭礼に対する研究視点を踏まえたものとする。

展示には、『葵祭図屏風』『やすらい祭・上賀茂競馬会図屏風』『祇園祭礼絵巻』年中行事絵巻(祇園御霊会)(旧岡田本)、『香取神宮神幸祭絵巻』

『神田明神御祭礼番附』『官幣大社札幌神社鎮座三十年記念祭市街巡幸之図』などを展示する予定である。本部門では、これまでも平成二十六年に「祇園祭」、平成二十七年に先述の二度の特集展示をおこなっている。これらで公開してきた研究成果も本展示に反映させる。

このほか、本年七月には神道展示室において祇園祭に関する展示を行い、平成二十七年に購入した『十七日乃祇苑会』を展示する。

・資料の撮影

本部門では、平成二十六年に「稲荷神社両御霊神社私祭之図」「香取神宮神幸祭絵巻」「祇園祭礼絵巻」「日光祭礼絵巻」「年中行事絵巻(祇園御霊会)」「旧岡田本」、『御蔭祭之図』を撮影し、本学図書館デジタルライブラリー上に公開した。

本年度は『葵祭図屏風』『やすらい祭・上賀茂競馬会図屏風』の撮影を行った。これも、本部門において調査・研究を進めた後、先の祭礼絵巻同様、デジタルライブラリー上に公開したいと考えている。

本事業の成果は、本年度中にブックレットなどの刊行物とし、これを本機構の行事の際や國學院大學博物館で配布することによって研究成果を学外に対しても公開したい。

(文責・大東敬明)

校史・学術資産研究センター 平成二十八年事業計画① 國學院大學における古典学の展開に関する研究と公開

事業の目的

本事業は、本学の学問史のうち、特に古典研究史に関わる研究を行い、その成果を本学博物館での展示や簡易なブックレットの作成などによって教育等にも還元することを目的とする。具体的には、校史資料の収集・保存や、本学博物館における展示、教養総合「神道と文化」サブテキストの作成・改訂作業と当該教材に関するアンケートの集計・分析といった、従来の本センターの日常業務を継続するとともに、平成十九年度より二十三年度まで本学が推進した文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」における「國學院の学術資産に見るモノと心」研究プロジェクトの研究活動を継承かつ発展させて、本学における古典学の展開に関する研究を行っていく。その研究成果は、本学博物館での校史関連展示での公開や、新たに作成するブックレット等を通じて学外へ発信するほか、学内の教育活動において活用していく。

以上のような本事業によって、学外に向けては本学の古典研究における学問的営為を周知する一助となり、また学内では学部学生の自校史理解がさらに進む一助になるものと考えられる。

前年度の成果と本年度の計画

本年度は、先述した本センターの日常業務を継続して行うほか、本学の古典研究を中心とした学問史に関する調査を行い、その研究内容の深化をはかる。そこで得られた成果は、本学博物館においての本学古典研究をテーマとした展示や解説シートの作成・配布を通じて、随時公開していく。また、本センターの教員・研究員が担当する授業等での一部活用も行う。最終年度となる本年度には、本研究事業のまとめとして、本学の古典研究史に関するブックレットを完成させ、これとあわせて、本学の古典研究史に関わる特集展示等を開催する。当該ブックレットは、この特集展示で配布するほか、本センターの教員・研究員による教育活動の上でも活用していく。

本年度は事業実施計画の最終年度である三年目となるが、以下に述べる前年度の成果を土台として進めるものである。

I 自校史教育

自校史教育関連としては、例年どおり、教養総合「神道科目」における「國學院大學の歴史」で使用されている、本センター作成の自校史教育用サブテキスト『國學院大學の一三〇年』（教育開発推進機構共通教育センター発行）のアンケートを関

係機関・部署と共同で実施した。平成二十七年度は、計一八五五通（前期一四〇通、後期七一五通）のアンケート集計を行った。なお、後期からはウェブシステムの導入に伴い、用紙による集計は前期のみとなった。

II 校史資料の整理・展示

校史資料の整理や活用に関わる作業としては、学内外からの自校史に関する問い合わせへの対応を日常的に行ったほか、校史関連の文書・図書資料の整理、資料寄贈の対応を行った。特に、収蔵庫内の校史関連資料については、集中的な整理活動を行い新たな校史資料の目録作成に取りかかった。

本学博物館における展示作業としては、有栖川宮コレクションを中心にした常設展の一層の充実をはかった。とりわけ、有栖川流書道に関する資料については、和歌懐紙・和歌短冊・和歌色紙にみられる歴代の書跡とともに、大硯・漆工菊御紋散蒔絵御重硯・漆工御短冊箱有栖川宮御紋付といった御文具を展示した。

また、「國學院大學学びへの誘い―明治国家と法政官僚―井上毅歿後一二〇年記念」においては、齊藤智朗が企画より携わり、ミュージアムトーク等も行った。

III 研究業績

本事業における教員・研究員による研究成果としては、國學院大學研究開発推進センター編『昭和前期の神道と社会』（平成二十八年二月刊）

に、渡邊卓「武田祐吉の学問態度と〈万葉精神〉」を発表した。また、本学の歴史や所縁のある人物にまつわる記事等をまとめたパンフレット『校史』第二十六号に計五本の小論・記事を発表した（IVに詳細記載）。そして、本センターの機関誌である『國學院大學 校史・学術資産研究』第八号（平成二十八年三月刊）には、前号に掲載された渡邊卓「三矢重松の学位論文と折口信夫をめぐって」をうけて、中村幸弘「三矢重松学位論文の浄書者と第五章執筆者と」を特別寄稿として掲載した。

IV 『校史』

本学の歴史や関係者にまつわる記事などをまとめたパンフレット『校史』第二十六号（平成二十八年三月）を編集・刊行し、高野裕基「特集展示『学徒出陣と國學院大學―出陣学徒のことば―』」、同「戦時下の皇典講究所・國學院大學」、古山悟由「宮良富壯の國學院②國學院大學入學と『大学令』大学昇格」、益井邦夫「大学昇格後の留学生荒澤（樞）雄太郎氏」、半田竜介「承久殉難五忠臣祭典写真と江木千之翁」の小論と資料紹介を掲載した。

本年度も第二十七号を刊行予定である。

これら成果の積み重ねを継続的に行うことで、本学における校史教育のシステム整備を進めていく。

（文責・渡邊卓）

校史・学術資産研究センター 平成二十八年度事業計画② 國學院大學の学術資産の研究と展示公開

事業の目的

本事業は、これまで本センターで遂行してきた「國學院大學の学術資産の研究と公開（平成二十〇～二十二年度）」「國學院大學における学術資産研究の発展と公開（平成二十三～二十五年度）」「國學院大學における日本史学を中心とする学術資産の発展と公開（平成二十六年度）」の一連の事業をさらに発展させて、本学の学術資産に関する研究成果を、従来の本学図書館ホームページ上でのデジタルライブラリーを通じた公開のほか、本学博物館での展示公開を行うことで、その地域還元を果たすことを目的とする。

上記の一連の事業により、一部の学術資産については目録を編纂し、その編纂過程における学術資産の調査・研究の成果を、本センターの機関誌などで発表してきた。しかし、学術資産の一般公開が広く求められる現在、研究者を対象とした機関誌のみならず、ひろく一般にもその成果を公開することが必要とされてきている。したがって、本事業の意義は、本学所蔵の学術資産に関する調査・研究の成果を展示により一般公開することで、研究の社会還元・地域還元を果たすとともに、学部講義などでの教育活動の上でも活用すること、研究と教育とを有機的に結びつけることにある。

前年度の成果と本年度の計画

本年度は、平成二十六年度に目録を刊行した近世史の成果展示を行い、続いて本機構学術資料センター神道資料館部門と連携しつつ、神道に関する展示を開催する。

また、最終年次となる平成二十九年度に①神道②古典文学③中世史④近世史の四分野を総合した学際的な展示を開催するため、それぞれの部門にあわせた学術資産の調査・研究を進めつつ、日常的に本センター構成員が意見交換等を通してその研究を深化させることで展示準備を行う。これら学術資産の調査・研究については、学内のみならず、学外所蔵資料との校合などを通して、資料価値を判断しながら研究を進める。あわせて、例年どおりデジタルライブラリーに解説を付す作業もあわせて行うことで、実際の展示公開だけではなくインターネット上の公開の充実も図る。

本年度は事業実施計画の二年目となるが、以下に述べる前年度の成果を土台として進めるものである。

I デジタルライブラリー解題作成
デジタルライブラリーに、新たに掲載すべき典籍・資料として下表に掲げた十一の典籍・資料を選定し、解説・書誌ならびに写真データを本学図書館との協働により公開した。

II 本学博物館における研究成果公開

本学の学術資産に関する研究成果の展示公開を計画通り二回開催した。まず、古典文学を中心とした展示として企画展「神仏・異類・人―奈良絵本・絵巻にみる怪異―」（平成二十七年十一月二十一日～平成二十八年二月七日、会期中入館者数・前期四九八三名、後期三九四九名、合計八九三二名）を行い、次に中世史の成果公開として企画展「中世の古文書をよむ―國學院大學所蔵の重要文化財「久我家文書」を展示―」（平成二十八年三月十九日～四月十七日）を行った。また、それぞれの展示においては、本センターの教員・研究員が以下に示すようにミュージ

カテゴリー	書名	図書番号
1. 神道文化関係	中臣祓記解	貴87
1. 神道文化関係	天照太神口決	貴1193
1. 神道文化関係	伊勢二所太神宮神名秘書	貴1187
4. 新古今和歌集	新古今和歌集卷十八	貴1864
5. その他の勅撰集類	風雅和歌集 伝姉小路基綱筆	貴4212
7. 歌学書・言語関係	梁塵秘抄口伝集 卷十 断簡 伝冷泉為相筆	貴1869
12. 史学・法制関係	下総国香取郡野境論裁許絵図	貴4240
12. 史学・法制関係	西城降誕録	準貴V-96
17. 古文書・古筆切関係	青蓮院宮尊円法親王自筆書状	貴1706
17. 古文書・古筆切関係	三条実冬自筆書状	貴1707
17. 古文書・古筆切関係	後陽成天皇宸翰	貴2148

アムトック等を行い、口頭による研究成果の発表もあわせて行った。

・企画展「神仏・異類・人―奈良絵本・絵巻にみる怪異―」ミュージアムトック・針本正行・大東敬明・荒木優也、ワークシヨップ・渡邊卓

・企画展「中世の古文書をよむ―國學院大學所蔵の重要文化財「久我家文書」を展示―」ミュージアムトック・千々和到・堀越祐一

III 研究業績

本学の学術資産に関する研究成果としては、本センター機関誌「國學院大學校史・学術資産研究」第八号（平成二十八年三月刊）に、論文としては堀越祐一「豊臣政権と毛利氏」の一本、資料翻刻・紹介としては針本正行「國學院大學図書館所蔵「張良物語」の解題と翻刻」、古谷易士「國學院大學図書館所蔵「大中臣祓同註」の解題と翻刻」、荒木優也「國學院大學図書館所蔵「新古今和歌集」酒井宇吉氏旧藏本上帖の解題と翻刻」、高見澤美紀「國學院大學図書館所蔵「下総国香取郡本矢作村・大根村野境論裁許絵図」の解題と翻刻」の四本を掲載した。

また、本学の学術資産に関する研究会として「校史・学術資産研究センター研究会」を一月三十日に開催し、本センターの教員・研究員のみならず、大学院生なども参加した。発表は、本センター兼任教授の針本正行、准教授の大東敬明、客員研究員の高見澤美紀の三名によって行われた。本年度も継続して行っていく予定である。

（文責・渡邊卓）

研究開発推進センター 平成二十八年年度事業計画① 研究開発推進センター研究事業

事業の目的

本事業は、二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」における研究事業を継承し、「建学の精神」に基づく国学的研究、すなわち精緻な文献等資料の考証に裏打ちされた総合的日本文化学を目指し、神道・日本文化の研究をさらに発展させることを目的とする単年度事業である。その遂行を目的として、「(ア)学内学術資産の活用による神道・日本文化に関する研究の推進」、「(イ)二十一世紀研究教育計画委員会研究事業の研究マネジメント」、「(ウ)神社界等からの外部資金の導入による研究プロジェクトの企画・実施」、「(エ)国内外の神道及びその関連領域の研究者・研究機関との連携関係強化」などを実施する。

平成二十七年年度の成果

平成二十四年度以降、昨年度まで実施した研究事業「昭和前期の神道・国学と社会」においては、当該テーマについての研究報告会や、「研究開発推進センター研究紀要」等における成果公開をおこなってきたが、昨年度は、その成果論集として、『昭和前期の神道と社会』（弘文堂、平成二十八年二月）を刊行した。

同書は、昭和前期の神道と社会との関係性を問い直すことをテーマと

して、特に満洲事変以降の非常時における神道と社会との関係性や、満洲事変以前と以後との変化を念頭に置きながら、神社界や諸制度の動向のみならず、国家主義者や研究者・宗教者などの動向にも目配りして、総力戦体制の構築が急務とされていく時代背景と人々の意識の変化等にも焦点をあて、学内外の二十四人の論考を一書として刊行した成果論集である。同書がテーマとした「昭和前期の神道と社会」を対象とする実証的研究は未だ蓄積が少なく、さらに資料に基づく議論を深めていくべき分野であることから、今後も継続して当該テーマの研究を視野に入れた研究事業を進めていきたい。

また、研究事業「昭和前期における神道・国学と社会」に関連して、神社本庁が所蔵する『皇国』『皇国時報』の研究への活用を目的として、当該資料を借用し、内外の研究者の利便に供するため、神社本庁によって作成されてきた『全国神職会会報』『皇国』『皇国時報（昭和五年から九年まで）』の総目次を継承する昭和十年から十九年にかけての『皇国時報』の目次作成を進めた（平成二十八年年度も継続）。

そのほか、本事業の成果を中心に刊行した『研究開発推進センター研究紀要』第十号（平成二十八年三月）には、藤田大誠「戦時下の戦歿者慰

霊・追悼・顕彰と神仏関係―神仏抗争前夜における通奏低音としての英霊公葬問題―、河村忠伸「御祭神に関する神社制度―別格官幣社配祀神 殉難戦没之将士を例として―」、武田幸也「神宮教・神宮奉斎会における神道教説」、佐藤一伯「翻刻」岩手護國神社御造営概記」（岩手護國神社奉賛会編）を掲載した。

なお、院友神職会の指定寄附金により、ハーバード大学ライシヤワー研究所に留学していた上西亘助教は、予定の期間を終えて、三月二十二日に帰国した。

平成二十八年年度の計画

本年度は、これまで研究開発推進センターにおいて推進してきた神道・神社関係資料の調査研究、国学関連人物データベース事業、「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」、「昭和前期の神道・国学と社会」の研究など、従来の研究成果を基盤としつつ、制度・思想の両面から、「近代の神道及び神職・国学者に関する研究」をテーマとして、本事業に携わる研究者個々の専門的見地から、それぞれ文献等資料の考証に基づく研究を進めていく。

具体的には、当該テーマに関わる学内外の文献資料、特に、個別の神社関係資料、神職・国学者の著作、関連資料の調査蒐集を中心として、それぞれ精査及び分析をおこなう。

その他、当該テーマに関する文献資料の調査蒐集のみならず、本学が所蔵する神道・国学に関する書籍・雑誌を対象として、広く神道・日本

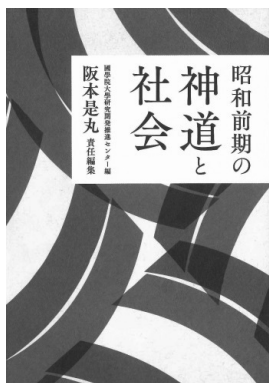
文化に関する資料を蒐集し、調査・研究をおこなう（神道・国学に関する学内資料の調査・研究）。

また、神道・日本文化研究を対象として、神社界および国内外の関連研究機関との連携、研究交流推進の企画・立案をおこなう。具体的には、ハーバード大学エドウィン・O・ライシヤワー日本研究所、明治神宮国際神道文化研究所との研究交流、明治聖徳記念学会、神道文化会との共催事業などを実施する予定である。

以上の研究事業、関連事業を中心に、研究開発推進センター研究会を開催し、本センターの構成員を核として、其々の進捗状況を確認するとともに、研究事業の課題について議論する。特に、本センターの事業成果を公開する『研究開発推進センター研究紀要』第十一号に掲載する論考執筆者を中心に研究会を実施していく。

なお、本研究事業の経費は、院友神職会の指定寄附金による。

（文責・宮本蒼士）



研究開発推進センター 平成二十八年度事業計画② 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 地域・渋谷から発信する共存社会の構築

事業の概要

本事業は、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業として、「建学の精神」を学術的に具現化するため、持続可能な「共存社会の構築」を目的として、「領域Ⅰ 渋谷」、「領域Ⅱ 地域（農山漁村）」、「領域Ⅲ 日本」、「領域Ⅳ グローバル化する世界」の四つの研究領域を定め、本学の特色を活かした研究を進めると同時に、領域横断的な成果の集約と検証を進める学部横断型の学際的研究事業である。

各領域の構成員は、「共存社会」の構築という視点から、現代社会における諸問題を見据えながら、それぞれの領域における人間と人間、人間と環境、歴史・伝統と現代、都市と地域の関係性等に焦点を当て、多様な社会の局面において観察される「共存の諸相」や「対立の諸相」（共存困難な実態）などの様態を探りながら、具体的事例に基づき検討を進める。本年度は、平成二十七年から二十九年度までの三カ年の事業計画における二年目となる。

平成二十八年度事業計画

本年度は、四つの研究領域における従来の研究調査の成果を軸として、領域横断的・学際的な観点による「共存社会」の在り方を引き続き

検討するとともに、その成果公開として、渋谷学グループ（領域Ⅰ・共存学グループ（領域Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ））

それぞれが学部の授業や公開研究会などの実施、「共存学叢書」、「渋谷学叢書」、ブックレットの刊行などを通して、その成果を教育・社会に還元するあり方を模索する。また本事業において、自らの専門分野を軸として、学際的視野を有する若手研究者の育成を図る。各領域の研究調査及び成果公開の実施計画は次のとおりである。

研究領域Ⅰ

研究領域Ⅰにおいては、現在進行中の渋谷再開発を視野に入れながら、昨年度から引き続き渋谷駅周辺の歴史と現状を対象とする調査・研究を実施するとともに、渋谷を中心とした東京の都市形成史と都市的現実を焦点として、「共存社会」構築の観点からの研究をおこなう。

具体的には、これまで渋谷の商店街関係者や渋谷に住む人々からの聞き取り調査を進めてきたが、本年度は「院友女性の会」の皆様（國學院大學を卒業した女性の会、平成七年発足）を中心に、それぞれの大学生時代（昭和三十年代～四十年代）における渋谷や國學院に関する記憶の聞き取り調査をおこない、記録化を

進める。この記録を基に、ブックレットを編集・刊行する予定である。

また、公開研究会「現代社会と民俗学―民俗学の可能性を考える―」（平成二十八年七月二日）を開催し、現代社会における都市・渋谷を念頭に置きながら、民俗学が現代社会の諸問題にどのように関わっていくことが可能かを模索する。当日の記録は、本年度刊行する『都市民俗研究第二十二号』に掲載する予定である。

その他、領域Ⅰの成果公開については、近現代の渋谷を主たるテーマとして、歴史学・民俗学・宗教学等の研究者がそれぞれの観点から執筆する成果論集『渋谷学叢書5』を刊行する。なお、同書の執筆内容を検討する研究会を随時開催していく。

また、「渋谷を科学する」をテーマとするオムニバス形式の学部授業「総合講座（渋谷学）」（平成二十八年度後期）を実施し、研究成果を教育に還元する。

研究領域Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

研究領域Ⅱにおいては、平成二十三年度以降継続している東日本大震災被災地のフィールド調査に基づき、昨年度、『共存学ブックレット 震災復興と大槌町 文化・自然・人のつながり』を刊行したが、本年度以降も引き続き、被災地の地域コミュニティに継承される歴史・文化的な力、特に神社、伝統芸能が復興に果たす役割などを焦点とする調査を実施していく。

研究領域Ⅲにおいては、本学における神道・日本文化研究の蓄積に立

脚し、日本の伝統文化や社会政策における「共存」の知恵を抽出するとともに、その可能性と限界を問いつつ、グローバル化する世界における日本社会の「共存」の在り方を探ることを目的として、研究調査を実施する。

研究領域Ⅳにおいては、グローバル化する世界で頻発する様々な諸問題や、複雑化する世界情勢を視野に入れながら、政治学・経済学・宗教学などの観点から、地球規模での多種多様な共存社会の可能性を探ることを目的として、研究調査を実施する。

以上、領域Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの研究成果を教育・社会に還元することを目的として、公開研究会を実施するほか、「地域（ローカル）」と世界（グローバル）を学ぶ・共存学の問い」をテーマとするオムニバス形式の学部授業「國學院の学問（共存学）」（平成二十八年度前期）を実施する。

また、本年度刊行予定の『共存学叢書4』においては、「共存の諸相」や「対立の諸相」などの具体例を検討するとともに、「共存の困難さ」や課題解決の方途を過去の実例に学びつつ、個別具体的な「共存関係の形成や展開可能性」、さらには「共存の知恵」や「共存していくための道筋」について模索することで、幾つかの「共存社会モデル」を提示することを目的として、編集・執筆を進める予定である。

（文責・宮本誉士）

研究開発推進センター 平成二十八年度事業計画③ 「古事記学」の構築

はじめに

本事業は、二十一世紀研究教育計画(第三次)で提起された、「日本文学の国際的理解に向けた研究(国際日本学)の推進」を具現化する研究事業である。すなわち日本文化の根幹を理解する鍵となる『古事記』について、國學院における従来の研究成果をふまえた上で、学際的・国際的視点から理解し、本学独自の「古事記学」の構築を目的とする。

國學院大學では皇典講究所の創立以来、神道・日本文化の根幹に関わる古典についての研究が継続して行われてきた。なかでも『古事記』については、国学の総合性のもと文学や神道学をはじめとする各分野からの研究が伝統的に行われてきた。そのため、本学における『古事記』研究は近代人文学が専門分化するなかにあっても、分野を超越して研究できる状況が整っている。

平成二十七年年度の成果

本事業は昨年度からの継続事業であり、平成二十五年度後期から二十六年度にかけて行った『古事記』の学際的・国際的研究」を発展・継承するものである。『古事記』を焦点として、本学で展開してきた『古事記』などの古典研究の成果を踏まえつつ、今日の研究状況に即した多方向

面からの研究を実施している。

二十七年年度の事業活動としては、研究会を五回開催し、葬送の神話をテーマとした国際シンポジウムを本年一月に開催した(詳細については前号の彙報を参照)。研究会の成果は成果刊行物である『古事記学』第二号にとりまとめた。内容は『古事記』上巻の火神被殺からみそぎまでを対象とした注釈と、各分野からの補注解説をとりまとめた。また二本の論考(遠藤潤「ヨミをめぐる『古事記伝』と『古史伝』—『古事記』解釈における思想編成の力学—」、中村幸弘「『浮きし脂』覚え書き」と一本の翻刻(井上隼人・小野諒巳「敷田年治『古事記標注』の翻刻と研究」)をあわせて掲載した。国際シンポジウムの内容については次号(第三号)に掲載予定である。

事業の目的

本事業は前年度までと同様にⅠ『古事記』の本文校訂・訓読・現代語訳と、Ⅱ『古事記』解釈史・研究史の研究からなる。Ⅰについては、國學院の古事記・日本書紀研究の蓄積を基礎として、本文に即した解釈の視点から今日の諸研究を再検討しつつ、それらを踏まえた新しい解釈と現代語訳を提示する。Ⅱについては、国文学史、歴史学、民俗学、神話

学、考古学の人文諸学の観点から『古事記』の現代的理解についての検討を進める。また、現代の研究動向や媒体(アニメ・ゲーム)など受容面の調査・研究も行う。これらⅠⅡの研究は研究会において共有化され、年度ごとにとりまとめて刊行する。

刊行物には研究論考の他、本事業で作成する新たな『古事記』の注釈書を掲載する。現状の『古事記』の注釈書は文学に特化したものが主流であり、比較神話や国文学史、歴史学などを総合的に網羅したものは見られず、また個人による注釈書が中心である。それらに対して本事業が作成する注釈書は、内容も作成方法も、これまでの注釈書とは方向性を異にする。例えば近年、研究がめざましい西欧諸国の神話研究や、中国・朝鮮半島といった東アジア文化圏の研究を踏まえることで、新たな視点を提示する注釈が可能となる。また、現状の注釈には国学者の言説が直接的に取り込まれることは少ない。しかし、新たな『古事記』研究のためには『古事記』研究の出発点に据えられている本居宣長の『古事記伝』の再検討が必要不可欠であろう。本学においては、これまでの国学研究の観点と現代の『古事記』研究の観点から宣長説を検討することが可能であり、そこから導き出された正しい評価に基づいて宣長説を理解し、新たな『古事記』注釈に反映させることができるのである。

また本事業は、次世代の『古事記』研究を担う若手研究者の育成も目指している。若手研究者を研究業務に

従事させるほか、大学院生などが参加できるワークショップを開催する。研究発表を行い、専門内外の研究者から指導を受ける機会を設けることで、学際的研究方法を身につけるきっかけを作る。

平成二十八年度の計画

先述した目的を達成するため、本年度は二つの活動を進める。一つめは『古事記』注釈の作成である。グループⅠによる『古事記』の校訂本文・訓読文・現代語訳の作成およびグループⅡ各班によるデータベース・文献リストの作成を進める。注釈は『古事記』上巻の三貴子の分治から天石屋戸までを対象に進める予定である。各グループの研究成果は定例研究会において協議し、共有をはかる。本年度の研究会は五月・七月・九月・十月・十一月の計五回を予定している。これら注釈を含む本年度の研究成果は個別の論考および前年度の国際シンポジウムの詳細とあわせて『古事記学』第三号にとりまとめ、年度末に刊行する予定である。

二つめは、ヨーロッパの神話研究に関する国際シンポジウムの開催である。フランスから研究者を招聘し、国内研究者との公開国際シンポジウムを十二月に執り行う。こちらの成果も個別論考としてまとめ、注釈とあわせて『古事記学』第三号に収録する予定である。

(文責・渡邊卓)

國學院大學博物館 平成二十八年度事業計画

一. 事業の目的

國學院大學博物館は、本学の建学の精神に基づき、長い伝統を持つ日本文化の精神性「心」を「モノ」から明らかにし、本学の学生のみならず、その成果を広く国内外の多くの方々に周知を図るべく活動している。

当博物館の基盤事業は、以下の三つの部門とコンセプトに基づき、各種事業を展開している。

考古「遺跡に見るモノと心」…考古学陳列室の創設以来、当館が収集してきた考古資料によって世界の中における日本列島史を俯瞰するとともに、



國學院大學学術メディアセンター概観 (博物館入口)

に、本学考古学研究室の学術調査や、國學院大學ならではの神道考古学的な研究成果も交え、この列島に生きる人々の「心」の歩みを辿っていく。

神道「神社祭祀に見るモノと心」…日本各地の神社―信仰が表現される場―を中心に行われてきたまつりに焦点を当て、そこで用いられる「モノ」と、その中に込められた「心」との関係を明らかにし、時代や場所ごとに多様な姿を見せる日本文化とその基層である神道の特質にも迫る。

校史「國學院の学術資産に見るモノと心」…國學院大學およびその設立母体である皇典講究所関連の資料・コレクションを通して、本学の歴史と学問の展開を追う。

これらのコンセプトに基づいた研究成果を、展示公開や教育普及などの活動を通じて教育現場や一般の方々に提供し、広く日本文化の理解と啓発を促進させることを事業目的としている。

これら基盤事業を基礎とした上で、当博物館は、他の博物館・美術館、文化団体、地域団体等と連携を図りながら事業を推進する。すなわち、研究成果の公開に加え、新たな視点の創造や、異分野との融合による学術資産の活用、外部との人材交流等の可能性や地域貢献の模索などを行う場としての役割をも果たすこ

とで、事業の発展に結びつけていく。

また、日本の文化・歴史を研究発信する施設として海外の需要にこたえることは、グローバル化する社会のなかで一層重要となる。その基礎となる解説媒体、ホームページ等の多言語化を継続的に実施し、訪日・滞日外国人が理解できる展示環境の構築と情報発信を進める。

平成二十八年度は、(Ⅰ)展示公開、(Ⅱ)教育普及、(Ⅲ)環境整備・営繕、(Ⅳ)運営支援の四点に加え、今年度も採択された(Ⅴ)文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」(14頁参照)を柱として計画している。

二. 今年度事業の概要

(Ⅰ) 展示公開…常設展示の三つの部門(考古、神道、校史)において、具体的な資料を用いた常設展示を実施する。また、学内研究機関と連携し、特別展・企画展を実施することによって、より特化した研究成果の公開を目指していく。

これらの展示公開においては、日本語と英語を中心とした多言語による解説パネル・シート等の内容の充実を図り、国内外の来館者に分かりやすく発信することを目指す。

加えて、博物館創立九十周年及びリニューアルオープンから十周年を見据え、常設展示等の改変計画作成に着手する。

(Ⅱ) 教育普及…来館者とインタラクティブな関係を取り結び、来館者の日本文化に対する理解を一層深める効果を期するべく、ミュージアム

トーク、ワークショップ、フォーラム等を企画・開催する。

(Ⅲ) 環境整備・営繕…関連施設の温湿度・照明管理、保存環境施設・演示具などの調達については、必要に応じて適宜実施する。

(Ⅳ) 運営支援…ホームページの多言語運用・更新等、事業実施に必要となる後方支援事業を実施する。

(Ⅴ) 文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」…平成二十七年に引き続き採択された支援事業で、本年度は「東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業」を実施する。当館を中核館とし、渋谷区、山種美術館、東洋文庫に加え、本年度より日仏会館フランス国立日本研究センターと国立オリンピック記念青少年総合センターが参画し、國學院大學博物館地域共働連携事業実行委員会(実行委員長・赤井益久学長)が実施する(14頁参照)。

三. 実施計画

(Ⅰ) 展示公開

平成二十八年度は、特別展を一回、企画展計六回のほか、特集展示や西南学院大学博物館との相互貸借展示等を行う。また、展示解説シート等の充実を図るほか、適宜、常設展示の一部展示替え等を実施し、リニューアル計画の策定にもとりかか

◎特別展・企画展

◆平成二十八年度特別展「ジョーモネスクジャパン二〇一六 火焰型土器のデザインと機能」、会期…平



ミュージアムトークの様子



企画展示室

成二十八年十二月十日〜平成二十九年二月五日、ミュージアムトーク…会期中、八回程度実施予定。関連イベント・国際フォーラムを実施予定。

◆平成二十八年年度第一回企画展「偶像(アイドル)の系譜―神々と芸能の一万年―」、会期：平成二十八年四月二十六日〜六月十二日、ミュージアムトーク…(1)「歴史に見る『アイドル』の原点」日時：平成二十八年五月七日十四時〜十五時、講師：深澤太郎(当館准教授)×石井匠(当館学芸員)、(2)「江戸・東京のカワイイ文化」日時：平成二十八年五月十四日十四時〜十五時、講師：藤澤紫(本学文学部教授)、関連イベント…第四十二回日本文化を知る講座『日本列島藝能史』全四回(主催：國學院大學研究開発推進機構、後援：渋谷区教育委員会)。

◆平成二十八年年度第二回企画展「古文書で〈つなぐ〉江戸時代」、会期：平成二十八年六月十七日〜七月十六日、ミュージアムトーク…(1)「戦乱から平和へ」、日時：平成二十八年六月十八日十四時〜十四時半、(2)「江戸時代を支える民衆」、日時：平成二十八年七月二日十四時〜十四時半、講師：根岸茂夫(本学文学部教授)

◆平成二十八年年度第三回企画展「〈学びへの誘い〉江戸文学の世界―江戸戯作と庶民文化―」、会期：平成二十八年七月十九日〜八月二十八日、ミュージアムトーク…会期中、二回実施予定。

◆平成二十八年年度第四回企画展「武蔵国高麗郡建郡一三〇〇年」日

本に根付いた渡来人―高麗郡と高麗神社―」、会期：平成二十八年九月三日〜十月十日、ミュージアムトーク…会期中、一回実施予定、シンポジウム…渡来文化ネットワーク・サミット in 東京「東アジアの国際交流―古代から未来へ―」を開催予定。

◆平成二十八年年度第五回企画展「祭祀行列 渡る神と人」、会期：平成二十八年十月十五日〜十二月四日、ミュージアムトーク…会期中、二回実施予定。

◆平成二十八年年度第六回企画展「國學院大學図書館所蔵神道関係資料(タイトル未定)」、会期：平成二十九年二月十一日〜四月九日、ミュージアムトーク…会期中、二回実施予定。

◎西南学院大学博物館との相互貸借展示
双方で三〜四回の展示替えを行う。

◎特集展示
「死者の書―折口信夫の学問と創作―」、会期：平成二十八年九月三日(土)〜十月十日、ミュージアムトーク…会期中、三回。関連イベント…映画上映会、講演会などを会期中に開催予定。

特集展示は、他に考古・神道・校史においても実施予定。
(Ⅱ)教育普及
ミュージアムトーク(基本的に特別展・企画展等毎に開催)、ワークショップ(四〜五回程度)、地域の博物館・美術館と連携した講演会、コンサートを実施予定。

(Ⅲ)環境整備・営繕
保存、展示環境の整備、演具等の整備を進める。保存・展示環境の管理・改善、演具・題箋などの整備。
(Ⅳ)運営支援
前述の実施計画を行う上で、必要となる後方支援業務を実施する。

具体的には、博物館ホームページの多言語運用の継続、研修への参加、学外でのレプリカ展示、國學院大學博物館地域共働連携事業実行委員会が実施する事業の遂行、学会参加等。
(Ⅴ)文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」
詳細は14〜15頁参照。

(文責：國學院大學博物館)



國學院大學博物館入口

平成二十八年度 文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」 東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信する ミュージアム連携事業

一、事業の目的

本事業は、平成二十六年度の文化庁「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」による「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」を発展的に推進するため、平成二十七年に引き続き、平成二十八年度文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の「東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業」を実施するものである。

昨年度同様、國學院大學博物館を中核館とし、渋谷区・山種美術館・東洋文庫と、本年度より新たな構成団体として日仏会館フランス国立日本研究センターと国立オリンピック記念青少年総合センターを加えた國學院大學博物館地域共働連携事業実行委員会（実行委員長・赤井学長）が実施する事業となる。

本事業は昨年度の事業同様、連携館の相互の知的・物的資源の活用と交流を図り、文化の発展や地域社会の振興、学術研究の向上、人材育成、生涯教育に寄与することを目的とする。

本年度は、過去二年間の取り組みによって事業展開が一層円滑になってきた渋谷界隈のミュージアム連携や、国際的連携拠点の構築を基盤と

ミュージアム連携事業

して、地域と世界を結び付け、相互の文化理解を促進し、世界に開かれた文化都市・渋谷の形成に資するところが更なる大きな目的となる。

以下に示す(一)「多言語化による国際発信」事業は、ミュージアムに外国人を誘引する大前提であり、(三)の「地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館」事業と相俟って日本文化研究発信の国際的連携拠点を、当館を中心とする渋谷地域に実現することを目的とする。(二)「地域とともにある美術館・歴史博物館」事業では、日本文化・渋谷文化の普及を目指す。そして、(四)「新たな機能を創造する美術館・歴史博物館」事業においては、日本文化と異文化の相互の送受信を試みる。

このような事業フローの構築は、ミュージアムによる教育・普及コンテンツを充実させるものであり、特に訪日外国人の増加を見据えた観光サービスの充実に向けたモデルケースを提供していきたい。

以上の取り組みによって、ミュージアムにおける展示活動を背景として、外国人向けサービスと、来館者の日本文化・異文化体験を充実させることが、平成二十八年度内に期待される主な効果と目的である。以下にそれぞれの概要を示していく。なお四月二十八日には、実施主体

である國學院大學博物館地域共働連携事業実行委員会会議において、事業の方針と計画が共有された。

二、事業の概要

本事業は4つの事業の柱で構成されており、以下にその概要と計画を記載する。

(一)「外国人来館者に対する多言語サービスの充実」事業(区分：「多言語化による国際発信」)

本事業は、中核館とその近隣にある連携館において、来館した外国人による資料・作品理解を支援するために、展示環境や情報発信機能の多言語対応力をもとに向上させていく連携事業である。

多言語化は平成二十六年度から継続的に取り組んでいるが、本事業では、①中核館において、新たに雇用するネイティブ外国人スタッフが、英語による外国人来館者の案内業務を試みる。同スタッフは、館内の様々な案内や解説の翻訳業務や学芸員の外国語能力開発の支援も担い、中核館の外国語サービス力の向上を図る。

②山種美術館では、展覧会での多言語解説環境のさらなる充実を図る事業を実施し、外国人への日本文化の理解をアプローチする。以上により、近隣二館での外国人対応力の向上を図る。

③また、中核館である國學院大學博物館は先史時代から近代に至る日本文化を研究し、その成果を展示に反映させている。そこで、本事業で



平成28年度國學院大學博物館地域共働連携事業実行委員会

も博物館とデジタルミュージアムで公開している資料に関する調査を行い、新たな知見と最新の画像を得、展示パネルや資料解説に多言語化とともに反映させ、様々な母国語を持つ来館者・サイト閲覧者に対応していく。

(二)「博物館を核にした地域の文化交流」事業(区分：「地域とともにある美術館・歴史博物館」)

本事業は、事業企画機関で行われた調査研究の成果を広く地域の人々へも公開することにより、各機関が地域における学びの場の一つとなることを目的とする。

この一環として、中核館と渋谷区及び国立オリンピック記念青少年総合センター(渋谷区)との連携によ



日仏会館フランス国立日本研究センター
クリストフ・マルケ氏

り、地域に根差した日本文化の体験に関するワークショップを開催し、日本文化普及活動事業を継続する。国立オリンピック記念青少年総合センターは、設立の趣旨に基づき、未来の日本を担う子ども・青少年のスポーツ・文化の普及を積極的に進めている。

地域を再発見するフィールドワークや、地域を通して日本の歴史・文化・芸術の理解を深めるワークショップの実践において、本事業の連携館として参画することで、継続的にその一翼を担う事業モデルとなる。

(三) 「日本文化発信のグローバル連携」事業(区分:「地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館」)

平成二十七年度の文化庁採択事業



国立オリンピック記念青少年総合センター
進藤氏・山本氏

では、国際シンポジウムを開催し、海外で日本関連の資料を展示、研究している博物館から担当の学芸員を招き、それぞれの博物館の現状報告を基に、今後の可能性を議論した。本事業では、この成果を踏まえ、国内外のいくつかの館の現場を見聞き、あらたな着想を得、今後の研究・情報支援・運営に反映させることを目的とする。

また、昨年度の国際シンポジウムに参画した国内の海外機関であり、日仏文化交流の中心機関である日仏会館フランス国立日本研究センターと連携し、フランスの日本文化研究の成果を博物館との関わりの中で発信し、また中核館を基盤とした國學院大學の日本文化研究の海外発信の機会としていく。

また、昨年度の国際シンポジウム

は、運営側の視点によるものであったが、新たなモデルとして、特定の展示会の関連事業として展示テーマを伴った国際シンポジウムを開催する。今回は火焔土器をテーマにした一般も聴講・理解できる具体的なテーマ性のあるシンポジウムを実施し、日本考古の現状を外国人へ普及させることで、日本の歴史・文化を国際発信する効果が期待できる。

(四) 「日本の文化とこころの発信」事業(区分:「新たな機能を創造する美術館・歴史博物館」)

本事業では、多様な来館者のニーズに応えるため、①世界との比較から日本の文化とこころを学ぶ、②日本の伝統・歴史から日本の文化とこころを学ぶ、③歴史博物館と日本美術から日本の文化とこころを学ぶという三つの企画の実施に、④障がい者の鑑賞活動支援の試みを加えた四つの柱で構成する。

①と②では、平成二十七年度から実施している「世界の宗教を知る」ワークショップにおいて、これまでに実施していない宗教をとりあげつつ、中核館での展示と絡め、さらなる宗教文化への理解を深めるプログラムの構築を試みる。

さらに、「渡来文化から学ぶ日本文化」として、東アジアから伝来した渡来文化によって育まれた日本文化への影響を考古資料と歴史資料から学ぶ多元的な事業を企画する。ゆかりのある埼玉県日高市の高麗神社の協力のもと、フォーラム、ミュージアムトークなどを実施する。

また、例年実施している浮世絵摺り体験は、これまでの企画に加え、初めての試みとして、外国人をターゲットにした「日本の伝統文化体験」としても実施する。英語でのワークショップの体制を整え、外国人への日本文化理解を促進させる。

③では、連携館である山種美術館と協力館である太田記念美術館とともに、展示会テーマをコンセプト化した美術面と学術面による日本文化を学ぶフォーラムを実施する。

④は新たな試みとして、障がいのある方にとって、まだまだ開かれた環境とはいえない美術館・博物館へのアクセスの可能性を探るべく、障がい者向けの鑑賞支援を試みる。

具体的には、障がい者が考古遺物を解説とともに実触できるイベントや、近隣の協力館である塙保己一資料館で実際の版木に触れるなどのイベント企画を試みる。

障がい者の鑑賞環境の構築はもとより、参加者にとって実のある企画として成り立つよう、これからの博物館、美術館における障がい者の鑑賞支援に必要なノウハウを収穫したいと考える。

(文責・國學院大學博物館地域共働連携事業実行委員会)

平成28年度 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧

平成28年6月1日現在

機関	研究事業名	専任教員	兼任教員	客員研究員	ポストドク研究員	研究補助員	客員教授	共同研究員
日本文化研究所	◎デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信 (H28~30年度)	*平藤喜久子 星野靖二 塚田穂高 鈴木聡子	井上順孝 黒崎浩行 藤澤 紫 ヘイヴンズ, ノルマン	市川 収 加藤久子 キロス, イグナシオ フレール, チャールズ	カスティリョーニ, アンドレア 村上 晶		土屋 博 ナカイ, ケイト 山中 弘	天田顕徳 李 和珍 ガイタニディス, ヤニス カドー, イヴ ビュテル, ジャン=ミシェル 野口生也 牧野元紀
	「国學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に— (H27~29年度)	塚田穂高	*遠藤 潤 松本久史		齋藤公太	芹口真結子	林 淳	一戸 渉 小田真裕
学術資料センター	大学ミュージアムにおける「学芸研究(考古学)」基盤の整備 (H26~28年度)	内川隆志 深澤太郎	*笹生 衛 小川直之 谷口康浩 朝倉一貴		伊藤大祐	北澤宏明	古谷 毅 柳田康雄	奥山 香 惟村忠志 植田 真 粕谷 崇 加藤元康 大工原豊 中島将太 中村 大
	大学ミュージアムにおける「文化財研究」基盤の整備 (H26~28年度)	内川隆志 深澤太郎	*笹生 衛 小川直之 黒崎浩行 谷口康浩 朝倉一貴	阿部常樹 鳥越多工摩				荒井祐介 石井 匠 栗木 崇 中村耕作 平本謙一郎 山口 晃
	大学ミュージアムにおける「学芸情報」基盤の整備 (H26~28年度)	内川隆志 深澤太郎	*小川直之 黒崎浩行 朝倉一貴		黒田迪子			石川岳彦 齋藤しおり
	祭祀・祭礼の変遷に関する研究と関連資料の整理分析 (H26~28年度)	大東敬明 鈴木聡子	*笹生 衛 岡田莊司 加瀬直弥		吉永博彰			
校史・学術資産研究センター	國學院大學における古典学の展開に関する研究と公開 (H26~28年度)	大東敬明 渡邊 卓	*阪本是丸 齊藤智朗		荒木優也	半田竜介		
	國學院大學の学術資産の研究と展示公開 (H27~29年度)	大東敬明 渡邊 卓 高野裕基	*根岸茂夫 岡田莊司 阪本是丸 千々和到 針本正行	高見澤美紀 堀越祐一	荒木優也	塩川哲朗		遠藤珠紀 金子 拓
研究開発推進センター	研究開発推進センター研究事業	宮本誉士 渡邊 卓 上西 亘 高野裕基 武田幸也	*阪本是丸 針本正行 太田直之 加瀬直弥 菅 浩二 中山 郁 藤田大誠 藤本頼生	神杉靖嗣			赤澤史朗	今泉直子 河村忠伸 坂井久能 佐々木聖使 佐藤一伯 大丸真美 津田 勉 東郷茂彦 中野裕三 森 悟朗
	國學院大學21世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」(H27~29年度)	宮本誉士 上西 亘 高野裕基 武田幸也	*阪本是丸 上山和雄 古沢広祐 松本久史	高久 舞	秋野淳一 杉内寛幸			赤澤加奈子 網谷哲成 池田奈津江 木村秀史 康 成文 重村光輝 筒井 裕 手塚雄太 西俣先子 野中規正 冬月 律
	國學院大學21世紀研究教育計画委員会研究事業「古事記学」の構築 (H27~29年度)	渡邊 卓 武田幸也	*阪本是丸 武田秀章 谷口雅博 遠藤 潤		井上隼人 小野諒巳			
國學院大學博物館	内川隆志 大東敬明 深澤太郎 渡邊 卓 鈴木聡子 高野裕基	*笹生 衛			今井信治	尾上周平		安高啓明

平成28年度 研究開発推進機構 人事一覧

平成28年6月1日現在

機構長	井上順孝	
日本文化研究所長	井上順孝	
学術資料センター長	笹生 衛	
校史・学術資産研究センター長	根岸茂夫	
研究開発推進センター長	阪本是丸	
國學院大學博物館長	笹生 衛	
國學院大學博物館副館長	内川隆志 及川 聡	
専任教員	教授	内川隆志
	准教授	大東敬明 平藤喜久子 深澤太郎 星野靖二 宮本誉士
	助教	塚田穂高 渡邊 卓
	助教(特別専任)	上西 亘 鈴木聡子 高野裕基 武田幸也
兼任教員	教授	井上順孝 上山和雄 太田直之 岡田莊司 小川直之 黒崎浩行 阪本是丸 笹生 衛 武田秀章 谷口康浩 千々和到 根岸茂夫 針本正行 藤澤 紫 古沢広祐 ハイヴンズ,ノルマン
	准教授	遠藤 潤 加瀬直弥 齊藤智朗 菅 浩二 谷口雅博 中山 郁 藤田大誠 藤本頼生 松本久史
	助手	朝倉一貴
研究員	客員研究員	阿部常樹 市川 収 加藤久子 神杉靖嗣 キロス,イグナシオ 高久 舞 高見澤美紀 鳥越多工摩 フレレ,チャールズ 堀越祐一
	ポスドク研究員	秋野淳一 荒木優也 カステリョーニ,アンドレア 伊藤大祐 井上隼人 今井信治 小野諒巳 黒田迪子 齋藤公太 杉内寛幸 村上 晶 吉永博彰
	研究補助員	尾上周平 北澤宏明 塩川哲朗 芹口真結子 半田竜介
客員教授	赤澤史朗 土屋 博 ナカイ,ケイト 林 淳 古谷 毅 柳田康雄 山中 弘	
共同研究員	赤澤加奈子 天田顕徳 網谷哲成 荒井祐介 李 和珍 池田奈津江 石井 匠 石川岳彦 一戸 渉 今泉宜子 植田 真 遠藤珠紀 奥山 香 小田真裕 ガイタニディス,ヤニス 粕谷 崇 加藤元康 カドー,イヴ 金子 拓 河村忠伸 木村秀史 栗木 崇 康 成文 惟村忠志 齋藤しおり 坂井久能 佐々木聖使 佐藤一伯 重村光輝 大工原豊 大丸真美 津田 勉 筒井 裕 手塚雄太 東郷茂彦 中島将太 中野裕三 中村 大 中村耕作 西俣先子 野口生也 野中規正 ビュテル,ジャン=ミシェル 平本謙一郎 冬月 律 牧野元紀 森 悟朗 安高啓明 山口 晃	

平成28年度 事務局人事一覧

学術メディアセンター事務部長	及川 聡
学術メディアセンター事務部次長(図書館事務課長兼務)	古山悟由
学術メディアセンター事務部情報システム担当次長	堀内弘行
研究開発推進機構事務課長	飯塚陽子
研究開発推進機構事務課	杉本久男 小倉 健 小平浩衣 織田泰輔 相川由起 志水志保(博物館担当) 網谷哲成 石井 匠 陣内理良(嘱託学芸員)

彙報

会議

○全体

- ・平成二十七年第五回運営委員会、平成二十八年二月十八日(木)十六時十分～十六時二十分、若木タワー四階会議室○五
- ・平成二十八年第一回運営委員会、平成二十八年五月十二日(木)十六時五十分～十七時十五分、若木タワー四階会議室○五
- ・平成二十七年第四回企画委員会、平成二十七年十一月二十五日(水)十一時～十一時二十五分、AMC棟五階会議室○六
- ・平成二十七年第五回企画委員会、平成二十八年一月二十七日(水)十一時～十一時四十二分、AMC棟五階会議室○六
- ・平成二十七年第六回企画委員会、平成二十八年三月九日(水)十一時～十一時四十二分、AMC棟五階会議室○六
- ・平成二十八年第一回企画委員会、平成二十八年四月十三日(水)十一時～十一時四十九分、AMC棟五階会議室○六
- ・平成二十七年第五回人事委員会、平成二十八年二月十八日(木)(持ち回り稟議)

○日本文化研究所

- ・平成二十七年第六回所員会議、平成二十八年三月二日(水)十一時～十一時五十分、AMC棟五階会議室○六
- ・平成二十八年第一回所員会議、平成二十八年四月六日(水)十一時四分～十一時五十分、AMC棟五階会議室○六

○学術資料センター

- ・平成二十七年第二回学術資料センター会議、平成二十八年二月十八日(木)(持ち回り稟議)
- ・平成二十八年第一回学術資料センター会議、平成二十八年五月二十四日(火)十三時～十三時四十分、AMC棟五階プロジェクトルーム二
- ・平成二十八年学術資料センター資料評価委員会、平成二十八年四月九日(土)十三時～十三時三十五分、AMC棟地下一階博物館多目的室

○校史・学術資産研究センター

- ・平成二十八年第一回校史・学術資産研究センター会議、平成二十八年六月一日(水)十三時十分～十三時四十分、AMC棟五階プロジェクトルーム二

○研究開発推進センター

- ・平成二十八年第一回研究開発推進センター会議、平成二十八年四月六日(水)十六時～十六時三十分、AMC棟五階プロジェクトルーム二

○國學院大學博物館

- ・平成二十七年第二回國學院大學博物館会議、平成二十八年三月九日(水)十一時四十五分～十二時三十分、AMC棟地下一階博物館ワークショップスペース
- ・平成二十八年國學院大學博物館地域共働連携事業実行委員会会議、平成二十八年四月二十八日(木)十七時～十八時二十分、AMC棟地下一階博物館ミュージアムホール
- ・平成二十八年第一回國學院大學博物館会議、平成二十八年五月二十四日(火)十四時～十五時、AMC棟地下一階博物館ワークショップスペース

○研究開発推進センター

- ・平成二十七年共存学公開研究会「移民と多文化共存」、共催：國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会
- ・研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」、「宗教と社会」学会公認プロジェクト「現代日本における移民と宗教」プロジェクト、平成二十八年二月二十六日(金)十三時三十分～十七時三十分、AMC棟五階会議室○六、第一報告：宮下良子(大阪市立大学)、第二報告：川崎のぞみ(筑波大学)、第三報告：星野壮(大正大学)、コメント：菊田真司(國學院大學・菅浩二(國學院大學)、討議司会：白波瀬達也(関西学院大学)、司会進行：杉内寛幸(國學院大學)

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

- 全体
- ・第四十二回 日本文化を知る講座「日本列島藝能史」、各回、十三時三十分～十五時、AMC棟一階常磐松ホール
- ◇第一回 五月二十一日(土)「江戸時代の大道芸」、講師：村上紀夫(奈良大学文学部准教授)
- ◇第二回 五月二十八日(土)「古代日本の芸能と音楽の考古学」、講師：石守晃(群馬県埋蔵文化財調査事業団 上席専門員)
- ◇第三回 六月四日(土)「何が芸能なのか」、講師：橋本裕之(追手門学院大学地域創造学部 教授)
- ◇第四回 六月十一日(土)「偶像の系譜」、講師：深澤太郎(國學院大學 研究開発推進機構 准教授)

出張

- 日本文化研究所
- ・遠藤潤・芹口真結子・齋藤公太、「明治期国学・神道関係人物に関する史料の調査」のため、平成二十八
- ・神道文化会公開講演会「神話と神道文化」(共催)、平成二十八年六月十八日(土)十三時～十六時、AMC棟一階常磐松ホール、講演1：現代と神話の読まれ方、講師：平藤喜久子(國學院大學研究開発推進機構 准教授)、講演2：古代の神話の読まれ方、「古語拾遺」を中心に、講師：松本久史(國學院大學神道文学部 准教授)

年二月十九日(金)、千葉県佐倉市

○学術資料センター

・深澤太郎、「仙台防災未来フォーラム2016におけるブリス展示の「出展」のため、平成二十八年三月十一日(金)～三月十二日(土)、宮城県仙台市

○研究開発推進センター

・宮本誉士・高野裕基・武田幸也、「北海道神宮に関する調査」のため、平成二十八年三月十一日(金)～三月十三日(日)、北海道札幌市
 ・大東敬明、「北海道神宮札幌まつり調査」のため、平成二十八年六月十五日(水)～六月十六日(木)、北海道札幌市

○國學院大學博物館

・大東敬明・網谷哲成、「西南学院大学博物館・國學院大學博物館『相互貸借特集展示』展示替え」のため、平成二十八年二月十五日(月)、福岡県福岡市

・網谷哲成・大村冬樹、「國學院大學博物館貴重資料レプリカ展示終了に伴う資料の撤収」のため、平成二十八年二月十七日(水)、山形県天童市
 ・井上順孝・齋藤公太・吉田尚文、「國學院大學博物館展示資料に関連する画像・映像収集のための現地調査」のため、平成二十八年三月四日(金)～三月五日(土)、三重県鈴鹿市・伊賀市、和歌山県和歌山市
 ・大東敬明・深澤太郎・網谷哲成、「ミュージアムトーク『天神人形―各地の天神さま―』」西南学院大学

博物館・國學院大學博物館『相互貸借特集展示』展示替え」のため、平成二十八年五月二十五日(水)～五月二十六日(木)、福岡県福岡市

・及川聡、「斎宮歴史博物館と國學院大學博物館による共同講演会に関する打ち合わせ」のため、平成二十八年五月二十九日(日)～五月三十日(月)、三重県多気郡明和町

刊行物

○全体

・研究開発推進機構『國學院大學研究開発推進機構紀要』第八号(平成二十八年三月三十一日発行)
 ・研究開発推進機構『機構ニュース』通号十七(平成二十七年六月二十五日発行)
 ・研究開発推進機構『機構ニュース』通号十八(平成二十八年二月二十五日発行)

○日本文化研究所

・日本文化研究所 *Encyclopedia of Shinto: Chronological Supplement* 『神道事典』巻末年表、英語版(平成二十八年二月発行)

○学術資料センター

・学術資料センター(考古学資料館部門)『國學院大學博物館研究報告』第三十二輯(平成二十八年三月十八日発行)
 ・学術資料センター(神道資料館部

門)『國學院大學神道資料館館報』第十五号(平成二十八年二月二十九日発行)

○校史・学術資産研究センター

・校史・学術資産研究センター『國學院大學校史・学術資産研究』第八号(平成二十八年三月七日発行)
 ・校史・学術資産研究センター『校史』第二十六号(平成二十八年三月六日発行)

○研究開発推進センター

・研究開発推進センター『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第十号(平成二十八年三月十日発行)
 ・研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集『昭和前期の神道と社会』(弘文堂、平成二十八年二月二十九日発行)

・研究開発推進センター渋谷学研究会編『渋谷開きがたり3 渋谷中央街を語る―再開発を迎える商店街の記録―』(平成二十八年三月十日発行)

・都市民俗学研究会(研究開発推進センター内)『都市民俗研究』第二十一号(平成二十八年二月二十九日発行)

・研究開発推進センター共存学グループ編『共存学ブックレット 震災復興と大槌町 文化・自然・人のつながり』(平成二十八年三月十日発行)

・國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業成果報告論集『古事記學』第二号(平成二十八年三月十日発行)

○國學院大學博物館

・國學院大學博物館『國學院大學博物館国際シンポジウム・ワークショップ2015報告書』(平成二十八年二月二十九日発行)
 ・國學院大學博物館『東京・渋谷から日本の文化を国際発信するミュージアム連携事業報告書』(平成二十八年三月発行)

資料紹介

伝佐賀県脊振山出土
銅製経筒

役行者を開祖とする修験道は、神祇信仰や山林仏教などの影響を受けて成立した日本独特の山岳宗教である。古来、水源やランドマークとし

ての山に対する信仰は、山麓祭祀に止まっていたが、八世紀頃から山頂祭祀が認められるようになり、山林仏徒による奈良県金峯山・栃木県日

光男体山・富山県立山などの山岳登拝も活発化した。十世紀になると、峰々を巡る山岳練行が各地の霊山ではじまり、十一世紀頃に修験道の独自性が確立する。

北部九州では、豊前の英彦山・求菩提山や、筑前の宝満山、そして筑前・肥前の国境に横たわる脊振山系などにおいて、早くから山岳霊場が発達した。この内、古代より筑前国

「背布利神」の坐す霊山とされてきた脊振山には、明治の神仏分離に至るまで、上宮東門寺（弁財天）・中宮霊仙寺（乙護法堂）・下宮積翠寺（修学院）をはじめとする多数の僧坊が営まれていたという。

脊振山の山頂（標高約一〇五五m）附近では、脊振村（現神埼市）が実施した発掘調査によって、平安時代後期の脊振山経塚群も発見されており、十一基に及ぶ経塚と、褐釉や白磁の蔵骨器などを納めた墳墓が四十基ほど確認された。特に遺存状態が良好な経筒からは、十八巻の紙本経が収められた形で出土している。

また、吉野ヶ里町の中宮霊仙寺跡でも、既に盗掘を受けた状態ではあったが、十二基もの石槨が連なる経塚が見つかった。これまでに、「鎮西肥前国背振山」・「康治元（一一四二）年」・「大勸進僧増忍」などといった銘文を持つ複数の経筒の存在が知られていたが、この経塚に納められていたものである可能性も指摘されている。

本資料は、脊振山から出土したとされる高さ約四三cmの銅製経筒であり、円筒形を呈する二段積み胴部に、相輪鈕の蓋が伴う。鍍金された器面には、所々に木炭片が銹着しており、埋納されていた当時の状況が窺われる。恐らく、木炭を充填した石槨の中に納められていたものであるろう。「□治四年」・「僧永□敬白」といった墨書も認められる。十二世紀前半の作品とみられる。

（深澤太郎）

